

ビバハウス便り NO.68 9名の高校入学者を送り出す春

ビバハウス 責任者 安達俊子

2月に入ってから、びっくりするような穏やかで暖かい日が続いたが、逆に3月は、少し暖かさになじんだ体にはきつ過ぎるほどの厳しい寒さと強い風の日が続いた。そんな気分を一掃してくれたのが、次々に送られてくる北星余市高校からの「合格内定通知」だ。

今年から初めて、なんとしても北星余市高校の廃校を阻止するために、(3年間連続で新入生が90人を切った場合は、理事会としても廃校を考えざるを得ないとの情報もあったので)ビバハウスから学校側に申し入れ、「北星余市高入学希望者のための入学前特別受け入れコース」を新設した。全国の学校説明会の場で、北星には進学したいが、今のままでは学校生活、寮生活に不安がある、また1日も早く今までの悪い友人関係を断ち切って新しい生活をスタートさせたい、などの切実な要望にこたえて、即座にビバハウスが彼らを受け入れることにした。毎年せっかく説明会に参加しながら、北星に入学できない事例を数多く目にしてきた反省に基づく決断だった。

ビバハウスの生活の中で自ら北星進学を希望した2名、ビバへの問い合わせで昨日突然北星へ進学する事になった者、学校からの紹介でビバハウスの生活を体験してから進学する5名、合わせて8名の新入生を4月7日の入学式に送り出すことになった。来年度は学校側と緻密に打ち合わせをして、年間計画を立て、倍増を目指し北星の存続に貢献したい。

ビバにはもうひとりの高校進学者もいる。札幌市立大通り高校定時制に進学するY君、24歳だ。彼はこれまでも、北星学園大学の私が依頼を受けた総合講座でも、つい最近3月14日に余市で開いた、ビバハウスと埼玉大学安藤ゼミの合同公開講座でも、自らの生い立ちを会場いっぱい響くような声で語っているので短く紹介したい。Y君は、小学校5年生の時にお兄さんが軽度の知的障害者だということで、級友からいやがらせを受け、6年生の春から中学を終えるまで自らの意志で学校を拒否した。ビバでの約3年間の生活で、どうしても高校に行きたいとの思いを強く持ち、生来読書好きで、抜群に記憶力のすぐれた彼の才能に火がついた。ビバスコレ校長の近藤先生、さらにはビバが紹介した北海道医療大学の女子学生の定期的個人指導も受けて、約5年間の学校生活のブランクを乗り越えて、このほど見事に高校合格を果たした。

彼のご両親によれば、登校拒否になってから10数箇所相談に出向いたが、毎回軽度発達障害、アスペルガーといわれるだけで、たらい回しに別の相談所を紹介されるだけだったという。ビバでの共同生活でも、突然大声を上たり、部屋の中で一晩中大きな声で物を読み上げるため、とても隣の部屋では生活できない、彼を何とかビバから出してほしいとの他のメンバーからの訴えも再三あったが、そのつど粘り強く本人の自覚を促し、同時に周りの若者たちにも彼の特性を理解してもらうように努めてようやく今日を迎えることが出来た。厚生労働省が、「若者自立塾」廃止に代わる、「若者自立支援6ヶ月合宿型プログラム」を提案してきた理由にも、若者の中にはY君のようにどうしても「合宿型」の中でのか、変化、成長させられない若者もいることに気がついたからだろうと確信している。